

解

題

元亨版『黒谷上人語灯録』全七巻は竜谷大学図書館に蔵されている。その第七巻『拾遺黒谷語録』巻下の後記には、元亨元年辛酉のとし、ひとえに上人の恩徳を報したてまつらんかため、又もろくの衆生を往生の正路におもむかしめんかために、この和語の印板をひらく。

一向専修沙門 南無阿弥陀仏 円智 謹疏

沙門了惠感歎にたへす、随喜のあまり七十九歳の老眼をのこひて、和語七巻の印本を書く。

元亨元年 辛酉
西七月八日終謹疏

法橋幸庵巻頭

とあるから、円智が開板し、了慧道光が印本を書き、法橋幸庵が謹疏してできたことになる。

円智とはいかなる人か。因みに知恩院第十一世にその名がある円智は延文十二年（一三五七）に寂している。この円智は『四十八巻伝』の編者知恩院第九世の舜昌の孫弟子に当たる。ならば一向専修沙門南無阿弥陀仏円智と名乗るにふさわしい立場にはある。当時舜昌の『四十八巻伝』編纂の余徳も残っていたことであろう。円智もまた法然上人の偉徳顕彰の念を強く持っていたことであろう。道光の長年にわたる法然上人遺文蒐集の大業に感じて『和語灯録』開板の意を伝えたのではなからうか。老齢七十九歳の道光は感激して、老軀を励まし、改めて『和語灯録』五巻『拾遺語灯録』二巻を点検整理し原本を書いたと思われる。円智を一説には西山六角義了音の法孫最勝の弟子ともいうが、道光との関係等も含めて確かなことは解らない。法橋幸庵巻頭の巻頭の意味は不明。法橋幸庵が謹疏とあるからには、恐らく元亨版全七巻の版本の下書文字（全七巻は一筆といえる）を書いたことを記したものであろうか。

周知のように法然上人の遺文集は、仁治二年（一二四一）頃に、勢親房源智上人の門流によって編纂されたと思われる醍醐本『法然上人伝記』（「一期物語」をはじめ六篇を収める―醍醐三宝院蔵）と康元元年（一二五六）から翌年にかけて親鸞が書写した『西方指南抄』（「法然聖人御説法事」をはじめ二十八篇を収める―高田専修寺蔵）および文永十一年（一二七四）から翌年にかけて了慧道光によって蒐集編纂された『黒谷上人語灯録』がある。

『黒谷上人語灯録』は、漢文体のもの二十二篇を集めた『漢語灯録』第一の十巻と、和文体のもの二十四篇を集めた『和語灯録』第二の五巻、および『拾遺黒谷語録』三巻（上巻漢語三篇、中下巻和語八篇）からなっている。編者望西楼了慧道光（一二四三―一三三〇）の全体像は、『摩訶衍』第十巻「道光上人特輯号」所収石橋誠道台下著「了恵上人の伝に就て」および玉山成元先生の『中世浄土宗教団史の研究』第三章第六節「三条派遣道光の活躍」に就いて見られたい。

道光が『黒谷上人語灯録』の編纂を思い立った趣旨は『漢語灯録』の序文（文永十一年―一二七四―十二月八日付）および『和語灯録』の序文（文永十二年正月廿五日付）の序文によって知ることができる。元亨版『和語灯録』の序文には、

なまころ黒谷の上人、勢至菩薩の化身として、はしめて弥陀の願意をあきらめ、もはら称名の行をすゝめ給ひしかは、勸化一天にあまねく、利生万人におよぶ。浄土宗といふ事は、この時よりひろまりけるなり。しかれば往生の解行をまなふ人、みな上人をもて祖師とす。

こゝにかなかれをくむ人おほきなかに、おのゝ義をとる事まちゝなり。いはゆる余行は本願か本願にあら

さるか、往生するやせずや、三心のありさま、二修のすかた、一念多念のあらそひなり。まことに金鍮しりかたく、邪正いかてかわきまふへきなれば、きくものおほくみなもとをわすれてなかれにしたかひ、あたらしきを費てふるきをしらす。尚書にいえる事あり、人貴旧器貴新、予この文におとろきて、いさ、か上人のふるきあとをたつねて、や、近代のあたらしきみちをすてんとおもふ。

仍であるひはかの書状をあつめ、あるひは書籍にのするところの詞を拾ふ。やまことはその文みやすく、その心さとりやすし。ねかはくはもろくの往生をもとめん人、これをもて灯として、浄土のみちをてらせとなり。もしおつるところの書あらは、後賢かならずこれに続け。

時に文永十二年正月廿五日、上人遷化の日、報恩の心さしをもていふ事しか也。
とある。

法然上人滅後六十余年、門流はその教えを様々に受け取り、種々の論議を行う。それがまた異義を生んで、法然上人の念仏義はその正義を失うかの状態にあった。この実情を嘆いて道光は、法然上人の遺教遺文の蒐集を決意する。各地に遺されている法語、書状等を探索し、真偽を検討して編を成すに至る。往生の志ある者の指南とせんためである。その蒐集された遺文は多量である。いかにこの事業が大きな規模と年数を要したかが伺われる。『和語灯録』第七卷の『拾遺黒谷語録』巻下の後には、

愚見のおよふところ集編かくのとし。しかるに世の中に黒谷の御作といふ文おほし。いはゆる決定往生行相抄、本願相應抄、安心起行作業抄、九条の北の政所へ進する御返事は三心をのせたる本なりは三通あり。これこの文ともは、余の和語の書に、文章も似す義勢もたかへり。おほきにうたかひあるうゑに、ふるき人偽書と申つたへたり。しかればこれをいれす。又廿二問答とて、廿六七張の文あり。又臨終行儀とて五六張の文あり。真偽しりかたし。いさ、かおほつか

なきによりてこれをのそけり。又念仏得失義といふ文あり。上人の御作といへり。しかれともこれはまさしくあらぬ人のつくれる文也。このほかにま事しからぬ文二三本あり。中々□いふにたらぬ物とも也。およそ二十余年のあひた、あまねく花夷をたつね、くはしく真偽をあきらめて、これを取捨すといへとも、あやまる事おほからん。後賢かならずた、すへし。又おつるところの真書あらは、この拾遺に続くへし。心さすところは、衆生をして浄土の正路におもむかしめんかためなり。あなかしこく。

望西楼沙門了慧謹疏

とある。二十余年にわたって、都鄙に遺文を探し求めたという。その蒐集と編纂の作業の綿密さが解かる。なお二十余年の探索の歳月を序文の文永十二年（一二七四）より逆算してみると、寛元元年（一二四三）生まれの道光の十代の事となり、到底不可能なことである。これは『黒谷上人語灯録』編纂後二十余年に『拾遺黒谷語録』ができたことを意味しよう。因みに『和語灯録』五巻と『拾遺黒谷語録』中下巻とは編纂の形式も異っている。

なお『黒谷上人語灯録』全体の書誌については、中野正明先生著『法然上人遺文の基礎的研究』第三章「黒谷上人語灯録について」を是非読まれたく、又浅井成海先生責任編集の元亨版『黒谷上人語灯録』（和語）―竜谷大学善本叢書十五―の解題を読みたい。

二二

元亨版『和語灯録』は『黒谷上人語灯録』巻第十一并序からはじまるので、元来は『拾遺黒谷語録』とは先行して『黒谷上人語灯録』として漢語第一―十巻、和語第二―五巻の編纂であったと思われる。それが元亨版の開板の際には『黒谷上人語灯録』和語第二に加えて『拾遺黒谷語録』中下二巻を置き、全七巻としたものと考えられる。

元亨板の体裁は、

粘葉装、縦二十四センチ、横十五・一センチ、紙数墨付第一冊七十六丁、第二冊九十三丁、第三冊七十七丁、第四冊七十五丁、第五冊六十六丁、第六冊五十八丁、第七冊七十七丁、半丁七行、一行二十字程度。付されている音訓の振仮名は後世の書き入れ。刊記に相当する後記は先掲の通り。

四

元亨版以後の印刻は寛永二十年（一六四三）刊行の片仮名本の寛永版と義山良照が正徳五年（一七一五）に開板した平仮名本の正徳版の二本があり、下って昭和五年（一九三〇）京都三条檀王法林寺刊行の活字版の『了患了患輯録法然上人和語灯録』がある。

寛永版『黒谷語灯録』

江戸期寛永二十年（一六四三）刊行の片仮名まじり本。元亨版と同じく七冊立てである。寛永版、町版といわれる（正大、仏大、竜大、谷大、京大蔵）。元亨版本の平仮名を漢字に改めているのは、読解を逆に容易ならしめようとしたものか。音訓の振り仮名や送り仮名、返り点、読点も付されている。仏大所蔵本の体裁は、

袋綴、縦二十五・九センチ、横十八・三センチ、紙数墨付第一冊三十八丁、第二冊四十二丁、第三冊三十五丁、第四冊三十五丁、第五冊二十八丁、第六冊二十五丁、第七冊三十三丁、半丁十一行、一行二十〜二十四字。第七冊末尾の刊記は、

寛永癸未孟春吉日

柳馬場二条下町

吉野屋権兵衛

正徳版『円光大師和語灯録』

正徳五年（一七一五）の刊行。平仮名まじり本で、正徳版、義山版といわれる。平仮名の音訓振り仮名、返り点、読点が付されている。江戸期浄土宗の学僧義山良照（一六四八―一七一七）の手に成る（正大、仏大、竜大、谷大、東大、東北大蔵）。元亨版と同じく七冊立てで、全冊外題は『円光大師和語灯録』となっている。仏大所蔵本の体裁は、

袋綴、縦二十七・五センチ、横十八・九センチ、紙数墨付第一冊六十一丁、第二冊六十七丁、第三冊五十五丁、第四冊五十六丁、第五冊五十一丁、第六冊四十七丁、第七冊五十五丁、半丁八行、一行二十―二十三字。第七冊末尾の刊記は、

正徳五^乙
未稔

正月吉日

書林
芳野屋権兵衛

沢田吉左衛門

なお第七冊には、刊記の前に下総鐫木光明寺良求の付記と義山の跋文があり、『漢語灯録』を含む義山版『語灯録』全体の刊行の事情乃至特徴を知る上に重要であるが割愛する。

いずれにしても義山による浄土宗典の改訂はよく知られているが、この正徳版においても宗義を意識しての判断か、元亨版と異なる箇所はかなりのものである。その点では法然上人の遺文集としての資料的価値は低いといわれるのもいたし方はないであろう。なお義山版は文化四年（一八〇七）同六年（一八〇九）明治十四年（一八八一）にも再版されている。また『浄土宗全書』第九巻にはこの文化四年版を活字化して収めている。

写本

『和語灯録』の零本（鎌倉末の写本といわれる）が京都大宮鞍馬口下ル安居院の西方寺に蔵されている。先年中野正明先生によつて残欠本の全文が翻刻された。著書『法然遺文の基礎的研究』には、その書誌および内容考察を含めて史料紹介がなされ、元亨版『和語灯録』自体の史料的価値を高めるものとして、また『語灯録』全体の編輯に係わる諸問題を解決するに資する好史料として評価が行われている。

元亨版の写本としては、完本が佛大に蔵されている。近年西村岡紹先生から寄贈されたもので、江戸時代前期の書写と思われ、体裁は

袋綴、縦二十六・三センチ、横二十・二センチ、紙数墨付第一冊六十五丁、第二冊八十一丁、第三冊六十七丁、第四冊六十五丁、第五冊五十七丁、第六冊五十丁、第七冊六十七丁、半丁八行、一行二十字程度。片仮名の振り仮名、平仮名の左訓がある。

この他元亨版の江戸期の写本として塩竈神社に第十五巻のみが蔵されている。

五 各篇の趣意

序文

欽明天皇の時、百済国より釈迦・弥陀の靈像が伝わったのは、弥陀・釈迦二尊が我国に往生の道を弘めようとなさつたからであるという。善導大師も法然上人も念仏の教えを二尊教とされるが、道光はそれを踏んでいる。以後法然上人に至つてはじめて弥陀の願意が解られ、称名の行が勧められたので、その教化は日本全国に広がり、利益衆生は万人に及んだ。浄土宗という事はこの時から弘まったという。因みに道光は法然上人を勢至菩薩の化身という。法

然上人は善導大師を弥陀の化身と仰がれたが、道光によってご自身も同様の鑽仰を受けておられる。これ以後往生の解行は法然上人をもって祖師としたという。法然上人が浄土門の元祖といわれるゆえんである。ところが上人の滅後には門流の間に異義が多出する。本願・非本願、往生・不往生、三心のあり方、専雑二修、一念・多念等の諍論である。新義今案の続出は道光の心を痛めることとなった。そこで法然上人の遺教を蒐集編纂して、念仏門徒の指南とすることを決意し、『和語灯録』を造ったのである。時に道光二十三年（一七一五）一月廿五日のことであった。

『和語灯録』卷第一

一、『三部経釈』第一

『浄土三部経』の略釈である。『双卷経』の段では四十八願は第十八願のためと説く。又諸仏の願意の本意は下化衆生にあるといい、弥陀の願とその願成就を述べ、「乃至一念」を説くことが『経』の大意という。『観経』の段では、「光明徧照十方世界念仏衆生」の念仏利益を説くことが『経』の趣旨であることを明すために、光明無量の願、諸仏称揚の願、念仏往生の願、寿命無量の願、来迎引接の願の順にそれぞれを撰取不捨の利益と関連づける。また三心を説く段で、深心釈において別願の不思議に次いで三字の名号を詳説するが、この記述は『逆修説法』六七日に説く名号観とは相反するもので注意を要する。その他釈尊の出世懐の所説、「自信偈」の釈、菩提心の釈等にも目を引くものがある。『阿弥陀経』の段では、弥陀・釈迦・諸仏の念仏であることを懇ろに説く。（この文は問題が多く、藤堂恭俊台下、坪井俊映台下、戸松啓真台下等諸先生の研究がある。）

二、『御誓言書』第二

世に『一枚起請文』といわれているもので、法然上人の念仏義を示した要文である。道光は巻第五「諸人伝説の詞」第二十四にもこの文を載せているが、この方は弁長上人の伝説としている。当巻のものには付記して「これは御

自筆なり。勢観上人に授けられき」という。『一枚起請文』については小川竜彦師が『一枚起請文原本の研究』を出されてから、王山成元生の反論（『中世浄土宗教団史の研究』第一章第四節第二項「一枚起請文について」）や中井真孝先生の論文（『法然伝と浄土宗史の研究』第五章第三節「一枚起請文の授受」）等がある。就いて見られたい。

三、『往生大要抄』第二

浄土宗の安心起行を述べようとしたが、実際は就行立信釈の頭で終わっている。道光は「この文に下巻あるへしと見ゆるか、いつくにかくれて待るにか、いまたたつねえす。もしたつねうる人あらはこれにつけ」と付記している。

内容は聖道門の四乗は難証であることを説き、浄土門に入るべきことを勧め、浄土門に入る者は善導大師の釈をもつて『浄土三部経』を習い、心と行と相応すべきことを説く。また九品の差別と三心を関係づけることや就人立信を確立すべきことを説くことが中心である。（この文は『和語灯録』のみにある。）

『和語灯録』巻第二

一、『念仏往生要義抄』第四

念仏往生の要義を述べたもの。問答体にて称名念仏、他力、自力、聖人と在家の念仏、澄心と妄心の念仏、一声と十声の念仏、最後と平生の念仏、撰取の益、智者と愚者の念仏等を説いている。（この文は異本として西本願寺所蔵長祿四年（一四六〇）書写『往生要義鈔』（漢文体）がある。）

一、『三心義』第五

三心について善導大師の釈義によって説いたもの。ただし次の部分は混乱がある。

つきに雑行といふは、さきの五種の正助二業をのそきて已外の、もろくの読誦大乘發菩提心持戒勸進等の一切の行なり。この正助二行につきて五種の得失あり。

とある正助二行は正雜二行の誤り。続く文を見てもらうとそのことは解る。(この文は『和語灯録』のみにある。)

一、『七箇条の起請文』第六

浄土宗の大事は三心の法門にあることを説いて、念仏相続の要心を述べたもの。七つあるので、この名がつけられたのであろう。

- 1、諸仏菩薩の悲願を軽んじないこと。
 - 2、偏えに願力を仰いで他力の念仏を申すべきこと。
 - 3、三心具足の念仏を申すべきこと。
 - 4、時々別時の念仏を修すべきこと。
 - 5、臨終正念は祈りもし、願うべきこと。
 - 6、常に念仏相続すべきこと。
 - 7、大驕慢の念仏者にならぬこと。
- (この文は『四十八卷伝』巻二十一にもある。)

一、『念仏大意』第七

往生浄土の望みを果そうとするものは、善導大師の教えに従って、一向専修の念仏門に入るべきことを勧めるもの。念仏門は時機相應の教えであり、利益現在のものであること。後世者は極楽・弥陀を軽んじないで、浄土に往生を遂げて悟りを開くべきことを勧め、殊に三心を具足すべきことを説く。道綽禪師や善導大師等の先達の入られた念仏門であるから、謗難の輩を相手とせず、易行の称名を専修すべきことを勧め、聖道諸宗の憤りに心を配る要はないなどを説く。(この文は『西方指南抄』巻下末にもある。)

一、『浄土宗略抄』第八

浄土の法門について、安心起行を中心に略説したものだ。道光は「本にいはく、この書はかまぐらの二位の禅尼（北条政子）の請によて、しるし進せらるる也」と記している。聖道門、浄土門の順に説き、難易二道から本願に至り、一筋に仏の誓いを仰いで称念する者を浄土門の行者として、浄土の行について心と行と相応すべきことを述べる。安心の三心は形通り至誠心、深心と次第して決定心を起さしめ、臨終時の来迎による正念往生を説く。さらに別解別行に破られない往生決定の心を起すべきことを説いて回向発願心に及ぶ。起行の段では、五種正行、正助二行と次第して正定業に至り、専雑二修の得失を説いて、よくよく念仏して位高く往生（上品往生）して、急ぎ還来して人を引導せよと説く。また善導大師の所説に従って念仏の現世利益を説き、病にも転重軽受の益があることを説いて、厭欣心を強くして念仏申すべきことを勧める。（この文は『和語灯録』のみにある。）

『和語灯録』卷三

一、『九条殿下の北の政所へ進ずる御返事』第九

九条兼実の妻の尋ねに対して、往生の行は念仏が勝れていることを説いたもの。弥陀の本願、釈迦の付属、諸仏の証誠の行であるから、往生の道には念仏が勝れていることを述べ、一向専念の但念仏者なるように勧める。（この文は『西方指南抄』卷下末、『四十八卷伝』卷十九にもある。）

一、『鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事』第十

鎌倉の二位の禅尼（北条政子）の尋ねに対して答えたもの。念仏の功德の広大なことを説き、本願は有智無智を簡はず、念仏の者を救うから、往生の道を尋ねる者には専修念仏を勧めるべきことを教える。また誹謗不信の者にも慈悲を加えるべきことを説き、五つの問いにであらうか答えてある。

- 1、結縁助成について。
- 2、雑善根について。
- 3、これも雑善根について。
- 4、念仏の申し様について。
- 5、不信の人について。

(この文は『西方指南抄』卷中末、『四十八卷伝』卷二十五にもある。)

一、『要義問答』第十一

出離生死の心得についての十三問答である。

- 1、出家について。
- 2、生死を離れる道について。
- 3、浄土往生について。
- 4、十方浄土、兜率往生について。
- 5、往生行について。
- 6、余行について。
- 7、浄土法門について。
- 8、心づかいについて。
- 9、一心不乱について。
- 10、行の様相について。

11、魔縁について。

12、滅罪について。

13、念仏について。

(この文は『西方指南抄』卷下末にもある。)

一、『大胡太郎実秀へ遣わす御返事』第十二

三心についての尋ねに対しての御返事である。三心を至誠心、深心の順に説き、特に決定の信を起こすべきことを説いて、疑心をもつことを誡める。念仏は弥陀、釈迦、諸仏の教えであり、善導大師も勧められた往生行であるから、深く信ずべきことを述べ、回向発願心を終って、往生を願う心を三心具足の心と説く。また臨終正念のための仏の来迎であることを教え、浄土宗の教えに従って正行を修すべきことを勧める。ついで五種正行、正助二行、専雑二修の得失、善導大師の教えと次第して説き、位高き往生を遂げて還来穢国度人天すべきことを教える。(この文は『西方指南抄』卷下本、『九卷伝』卷五下にもある。)

『和語灯録』卷四

一、『大胡太郎の妻室へ遣わす御返事』第十三

念仏についての尋ねに対しての御返事。道光は「わたくしにいはく、この御文は正治元年^{己未}、御つかひは蓮上房尊覚なり」と付記している。念仏は弥陀の本願であること。本願の念仏は称念であることを教え、いかなる余行も及ばないこと、誓願の不虚なること、摂取不捨の利益があること、釈迦の付属、諸仏の証誠の念仏であること、善導大師は弥陀の化身であるから偏依に依ること、専雑二修には得失があることを説き、信心を深くして二心なく念仏するよう勧める。(この文は高田専修寺蔵『法然聖人御消息』「上野太子女房御返事」建長七年(一二五五)書写 釈慶信

及び釈願行伝持本、『西方指南抄』卷下本、『四十八卷伝』卷二十五にもある。）

一、『熊谷入道へ遣わす御返事』第十四

熊谷直実の尋ねに對しての御返事。娑婆を厭い、極樂を欣う心が発つた上は、弥陀の本願は深重であるから、往生は掌中にあるのも同然なので、念仏を怠たらずして往生すべきことを教える。（この文は『西方指南抄』卷下末にもある。）

一、『津戸の三郎入道へ遣わす御返事』第十五

津戸の三郎の尋ねに對しての御返事。「九月十八日真勸承」とある。四答。

1、念仏の行は有智無智を簡ばないこと。

2、雑善根も念仏の行を妨げない限りは制止するほどのことはないこと。

3、念仏の行は時処諸縁を簡ばないこと。

4、念仏不信の者とは諍わず、同行の思いをなして往生浄土を欣うべきこと。

（この文は『西方指南抄』卷下末、『九卷伝』卷三上、『四十八卷伝』卷二十八にもある。）

一、『黒田の聖人へ遣わす御文』第十六

黒田の聖人へ示された浄土宗の教え。『一紙小消息』ともいわれている。室町初期に浄土宗七祖了譽聖阿上人（一三四一〜一四二〇）は、『五重伝書』初重『往生記』のこの文を「総結文」と名づけ、往生の機分のあるべき相を示すものと見たが、その観点から読む方が、内容は理解しやすいと思う。往生浄土の機根として洩れるものはないから四つの疑いを除けといい、所求、所帰、去行の三を示し、往生の得不是信心の深さによることを説き、五難を越えて浄土に生まれることを悦び、撰取門があるから、つとめて抑止門に心を用い、信を一念十念に取り、行を多念に修す

べきことを教える。念仏は弥陀、釈迦の教え、諸仏の証誠の行であるから、弥陀の本願に遇い得たことを天地の間に悦びつつ、釈尊が念仏を教えて下さった恩徳に報いるためにも、行住坐臥に念仏すべきことを述べ、乃至十念の本願を頼み、必得往生の釈文を信すべきことを勧める。「天にあふき地にふしてもよろこひつつ」となっているので、通常読む『小消息』との語感と意味の異なりを、この『和語灯録』の『小消息』ではどのように解すべきかは問題である。(この文は『西方指南抄』巻下末、『四十八卷伝』巻二十一にもある。)

一、『越中国光明房へ遣わす御返事』第十七

一念往生の義の是非についての間に答えたもの。「およそ言語同断の事」と否定してある。願成就文の「乃至一念信心歡喜」は、善導大師の釈意によると上尽一形を兼ねるから、十念一念まで引接せられる無上の功德を信じて、一期不退に念仏を行すべきことを教える。一念往生の義に対して、邪見の人、附仏法の外道と厳しく排斥する。(この文は『西方指南抄』巻下本、『四十八卷伝』巻二十九にもある。)

一、『正如房へ遣わす御文』第十八

後白河法皇の皇女、式子内親王(法名承如法)へ宛てた御返事といわれる。重病の正如房からの尋ねに対し、別時念仏中でもあるので、見参は断念して、浄土での再会を期し、一筋に念仏すべきことを勧める。往生は我が身の善悪によらないこと。念仏不信の輩にも心動かされず、臨終の善知識はなくとも、仏を善知識として、仏の来迎を得て正念に住すべきことを願ひ、心念口称せよ、と力付けている。(この文は『西方指南抄』巻下本、『四十八卷伝』巻十九にもある。)

一、『禪勝房に示す御詞』第十九

弟子の禪勝房に与えた教え。一向専修の念仏者たる上は、臨終の時まで一期念仏して往生すること、念仏申す機は、

生まれつきのままで申すこと、信をば一念に生まると取って、行をば一形励むべきこと、一念を不定に思う者は、念々の念仏ごとに不信の念仏になる、など重要なことが示してある。(この文は西本願寺藏『念仏往生要義抄』長禄四年―一四六〇―書写本にもある。)

一、『十二問答』第二十

問者は禅勝房といわれている。浄土宗の要義についての問答。

- 1、浄土宗を立てること。
- 2、法華、真言等は雑行か。
- 3、雑善根に結縁助成すること。
- 4、九品の差別は弥陀が構えたか。
- 5、持戒、破戒の念仏と往生後の品位。
- 6、称名と心念の念仏。
- 7、日別の念仏相続
- 8、十声一声と念々不捨者の念仏。
- 9、本願の一念と尋常の機、臨終の機。
- 10、自力と他力。
- 11、三心の具し様。
- 12、臨終の一念と平生の念仏。

道光は、「この問答の間をは、進行集には禅勝房の間といへり。ある文には隆寛律師の間といへり。たつぬへし」と

付記している。(この文は『西方指南抄』卷下本、『九卷伝』卷四下、『四十八卷伝』卷四十五にもある。)

一、『十二箇条の問答』第二十一

念仏往生についての問答。

1、念仏往生。

2、滅罪の法。

3、名聞利養と念仏。

4、念仏の申し様。

5、妄念と念仏。

6、易往而無人。

7、願往生心と勇猛心。

8、念仏者の所期。

9、信心。

10、余善。

11、本願と悪業。

12、凡夫のふるまい。

(この文は『和語灯録』のみにある。)

一、『二百四十五箇条問答』第二十二

諸人の諸種の問に対して答えたもの。

1、堂塔修理と供養。2、開眼と供養。3、真如觀。4、空觀。5、七仏名号。6、師。7、妄念と念仏。8、經の陀羅尼。9、普賢經。10、赤子の不淨。11、百万遍。12、阿弥陀經十万卷。13、日所作の念仏。14、口臭と念仏。15、齋の精進。16、六齋の服薬。17、六齋の期間。18、日所作の数。19、日所作の阿弥陀經の数。20、五色の糸の引き方。21、法文を焼く法。22、戒和尚、阿闍梨。23、齋の功德。24、臨終の定印。25、来迎。26、臨終の念仏。27、出離生死。28、授戒と持戒。29、仏の箔。30、日所作と仕入。31、卷經。32、仏に具する經。33、經の誦み方。34、仏の供養。35、常不輕菩薩。36、忌。37、仏と膠。38、尼の服薬。39、父母の先に死ぬ。40、生きて造る功德。41、人の護りと供養。42、誑惑に物をやる。43、經と供養。44、經を千部誦むと供養。45、懺悔と莊嚴。46、花香の供養。47、經を僧に受ける。48、聴聞、物詣。49、神に後世を申す。50、說經師の罪。51、香を持つ。52、妻が男に經を習う。53、還俗の僧に目を合わす。54、還俗。55、神仏詣の精進。56、歌を詠む。57、酒を飲む。58、魚、鳥、穴。59、尼の百日精進。60、仏を造つて經を具す。61、わが身の功德の程度。62、經と仏。63、錫杖を誦す。64、忌みの日の物詣。65、滅罪。66、臨終の善知識。67、誹謗正法と五逆罪。68、死者の剃髮。69、心の妄念。70、臨終の物の具。71、五色の糸を撚む。72、楊杖。73、服薬の綿。74、よき物を着て、悪所に居て往生を願う。75、月經の時の經誦み。76、仏を怨む。77、ひる、ししの忌み。78、月經の時の神の料の經。79、出産の忌み百日。80、法華經を誦むことと魚を食う。81、数珠、掛帯と經。82、齋の御料。83、口を洗わず念仏。84、信施。85、神の辺りの物を食う。86、僧の物を食う。87、大仏、天王寺辺りの僧の物を食い後世を取る。88、齋の朝の御料。89、齋の早朝に御衣を打つ。90、持戒後の精進。91、聴聞の功德。92、念仏行者の物詣。93、物詣の回向。94、ころぎさぬ魚と殺生。95、服薬の数珠を洗う。96、千手、薬師と物忌み。97、六齋のなら、ひる。98、齋の食物。99、三年拌み。100、齋の生飯。101、女の物妬み。102、在家の往生。103、五色の糸を切る。104、念仏と立腹。105、有髪のままに死ぬ。106、尼が子を生み、男

を持つ。107、尼が髪を生やす。108、経、仏を売る。109、人を売る。110、精進の爪切りと剃髪。111、祭文を書く。112、酒の忌み三日。113、魚鳥を食べて沃懸して経を誦む。114、妻男の経を誦むと沃懸。115、大根、柚の行い。116、落飾の髪。117、尼が紺の衣を着る。118、物語と洗髪。119、仏を怨む。120、八專の時の物語。121、灸治の時の物語。122、ひる、ししを食べて三年以内に死ぬと往生せず。123、死因と往生。124、子の孝養。125、出産の忌みはいく日。126、没後の仏経。127、日所作の仕入。128、出家の老若の功德。129、仏に花を参らせる功德。130、忌みの者の物語。131、物語の帰りの精進落し。132、斎の折りの誦文。133、女房の物妬み。134、桐の灰を髪につける。135、物参りの精進三日。136、物籠り三日。137、数珠の材に桜、栗。138、法師の罪。139、現世の祈りと験し。140、臨終の時の不浄と仏の来迎。141、往生のための財施の功德。142、破戒、愚痴の僧への供養の功德。143、日所作の数。144、真言の阿弥陀供養法と正行。145、魔悪修善と念仏。(この文は『四十八卷伝』巻二十一にもある。)

一、『上人と明遍との問答』第二十三

高野の明遍僧都との問答。

- 1、罪濁の凡夫の出離生死。
- 2、念仏の時の散心。

散心ながら念仏申す、というのが法然上人の答えであった。(この文は『明義進集』巻二にもある。)

一、『諸人伝説の詞』第二十四 付御歌

隆寛上人、乗願上人、信空上人、弁阿上人、禅勝房、沙弥道遍の六人が、それぞれに法然上人から聞いた教えを記す。

隆寛律師の伝聞。

1、念仏の他に『阿弥陀經』の読誦を毎日三卷三通りに行ったが、今は一卷も誦まず一向に念仏を申している。
（『明義進集』卷二、『四十八卷伝』卷四十四、『隆寛律師略伝』にもある。）
乘願上人の伝聞。

1、色相観は『観經』の説であるが、今はやめて、但信の称名のみである。（『一言芳談抄』、『決答授手印疑問鈔』
（漢文体）にもある。）

2、人目を飾らずに往生の業を相続すれば、自然に三心は具足する。（かの『二十八問答』よりいてたり」と道光
はいが不明。この語は『和語灯録』のみにある。）

3、蓮台に乗る時までは「あはれこのたひしおほせはやな」の思ひは絶えない。（『四十八卷伝』卷二十一、『閑亭
後世物語』卷上、『一言芳談抄』卷下にもある。）

信空上人の伝聞。（この場合、複数の人物の伝聞と同じものが多くある。）

1、ただ善導一師だけが、菩提心なくして、觀察を称名の助業とされた。当世の人は善導の心によらなければ、た
やすく往生はできない。（『和語灯録』のみにある。）

2、念仏往生のことを知らない間は、それを学べ。知ったならば少しばかりの智慧求めて称名の時間を妨げてはな
らない。（『和語灯録』のみにある。ただし後出の道遍の伝聞および『一期物語』第十話と同意。）

3、持斎のことは、自身でよく考えよ。（『和語灯録』のみにある。）

4、一期のありさまは、念仏の相続するように計らえ。（『和語灯録』のみにある。）

5、廃悪修善は諸仏の通誠だが、別意の弘願によらなければ出離生死はむつかしい。（『和語灯録』のみにある。）

6、ただ深く本願を頼んで、口に名号を称することだけが、大事な往生行である。（『和語灯録』のみにある。）

7、衆生称念必得往生と知れば、自然に三心を具足できる。（『和語灯録』のみにある。）

8、必ずしも数にこだわるのではない。ただ常念のためである。（『和語灯録』のみにある。）

9、聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ、浄土門の修行は愚痴に還って極楽に生まる。（『和語灯録』のみにある。）道光はここで、「已上信空上人の伝説なり。『進行集』よりいてたり」という。

10、念仏申すにはまったく様もない。ただ申せば極楽に生まると知って心を至して申せば参る。（『明義進行集』巻五、
『四十八巻伝』巻二十一にもある。）

弁阿上人の伝聞。

1、我れはこれ烏帽子も着ざる男なり。愚痴の法然房が念仏して往せんというなり。（『四十八巻伝』巻二十一にもある。道光は「『物語集』にいてたり」という。）

2、我れ申す念仏の様、風情ありて申しそうらわば、毎日六万遍の勤め虚しくなりて三悪道に落ちそうらわん。（『四十八巻伝』巻二十一にも一部分ある。道光は『物語集』という。）

3、一丈の堀を越えんと欲わん人は、一丈五尺を越えんと励むべし。（『東宗要』（漢語体）巻四、『四十八巻伝』巻二十一にもある。道光は『物語集』という。）

4、『一枚起請文』（『九巻伝』巻七下、『四十八巻伝』巻四十五、『和語灯録』巻一の『御誓言書』（勢観房相承）、道光はここでは『物語集』という。）

5、源空が目には三心も南無阿弥陀仏。（『四十八巻伝』巻二十一『末代念仏授手印』（漢語体）にもある。）

6、わがごときはすでに戒定慧の器にあらず。（『四十八巻伝』巻六、『徹選択本願念仏集』巻上（漢文体）にもある。）

禪勝房の伝聞。

1、踊躍歡喜の心の発りたらん人は、自然に三心は具足したりと知るべし。（『四十八卷伝』卷六にもある。道光は『念仏問答集』に出でたり、という。）

2、往生の得否はわが心に占え。（道光は『念仏問答集』よりという。）

3、我れ一人決定往生せんと思ふべし。（『四十八卷伝』卷二十一。道光は『念仏問答集』よりという。）

4、年ごろ習い集めたる智慧は往生のためには要にも立つべからず。（『西方指南抄』卷下本『四十八卷伝』卷四十

五にもある。道光は『念仏問答集』よりという。）

5、本願の念仏は一人立ちをせさせて助をささぬなり。（『四十八卷伝』卷二十一。道光は『念仏問答集』よりという。）

6、ただ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は法爾道理にて具わるべきなり。（『四十八卷伝』卷二十一。道光は『念仏問答集』よりという。）

7、現世を過ぐべき様は念仏の申されん様に過ぐべし。（『四十八卷伝』卷四十五。道光は『念仏問答集』よりという。）

沙弥道遍の伝聞。

1、往生生のためには念仏第一なり。学問すべからず。ただし念仏往生を信ぜんほどはこれを学すべし。（道光は『宗要集』にいたりという。）

諸人伝説の詞は『一枚起請文』を例に取るまでもなく、複数の人が伝聞したと思われるものがある。たとえば道遍伝聞の「学問すべからず」のおことは、信空上人の伝聞にもあるし、『一期物語』にもあるから源智上人の伝聞の

詞でもある。広く『漢語灯録』等も併せて見るべきものである。

一、御歌（『四十八卷伝』卷三十、他に一部『九卷伝』卷六上、『拾遺古徳伝』卷七・八にも見える。）

『拾遺黒谷語録』卷中

一、『登山状』第一

『登山状』は元久二年（一一〇五）ごろの作なので、『元久法語』ともいう。『四十八卷伝』卷三十二には、法然上人が聖覚法印に筆を取らせて趣旨を書かせられた書状とし、「総じては生死をいとい、仏道に入るべきいわれ、別しては無智の道俗男女の念仏することによって、諸宗のさまたげとなるべからざるむね」を述べられたとすることは、よくこの書状の内容が二部から成っていることを解している。『登山状』はこの他に無住の『雑談集』卷四「無常ノ言」に前半の部分が引用されている。『登山状』自体が前半と後半とでは文体の異なることもあって、この間の事情についての取り沙汰は色々に行われている。

前半は美文である。流浪三界の来し方を悲しみ、仏法流布の世に遇うたことを喜び、速やかに出離の要道を求めるべきこと。釈尊一代の教えは聖浄二門であることを示して浄土門に入るべきことを説き、浄土宗は『観経』には定散二善が説かれるけれども、本意は称仏名号にあることを示して、我らはこの分齊であることを説く。

後半はまずこの『観経』による浄土宗を、善導大師の釈義によって、釈迦の発遣、弥陀の来迎の二尊教であることを示し、定善、散善、弘願の三門を立てて、弘願の念仏は弥陀、釈迦、諸仏の勧めであることを教えてよるべきことを説く。次に念仏の興隆は対外的には南都北京の学者、本寺本山の禅徒の「仏法失せなん」という危機感を喚び、種々の難破が致されていることに対する反論を行い、念仏も諸宗も共に仏法、互いに是非を諍うことは仏意に背く行為と戒める。対内的には本願を誇る輩を戒め、諸悪莫作衆善奉行は、三世諸仏の通誠であることを示す。「つみをお

そる、は本願をうたかふと、この宗にまったく存せざるところ也」と教え、「信を一念にむまるとりて、行をは一形はけむへし」と勧める。次に弥陀の本願こそ、造悪不善の凡夫のために発されたものであり、その願は成就せられて、十方の諸仏も同音に証誠されているから、すべからく念仏に励むべきことを波羅奈国の太子の譬をもつて説き、超世の悲願の念仏を行ずべきことを教える。（『四十八卷伝』卷三十二、京都安居院西方寺藏室町末期写本にもある。）

一、『ある人に示すことば』第二

念仏者の心すべきことがら四を示したもの。

1、大小便の際、西に向ったり、西を後にしてはならない。恭敬修に相当する。

2、孝養の心があり、父母を大事に思うものは、弥陀に頼んで父母を引接して往生せしめ給えの心に念仏すべきこと。普為師僧父母同得往生の大乗の心である。

3、善導大師の「若我成仏十方衆生―衆生称念必得往生」の釈文は、第十八願が四十八願の眼であることを表わした妙釈である。

4、罪を恐れるのは本願を軽んじ、身を慎しむは自力を励むこと、というのは邪義と厳しめ、懺悔して念仏すべきことを教える。（『拾遺黒谷語録』のみにある。）

一、『津戸三郎へ遣わす御返事』第三

1、津戸三郎が人に念仏往生のことを尋ねられたので、その答え様を法然上人に問うたことに対する返事。念仏より他に往生の道はないことを説けといひ、詳しく説いても、道心のない者には無益であるし、手紙には書き切れないので、という趣旨である。十月十八日付。（『九卷伝』卷四下、『四十八卷伝』卷二十八にもある。）

2、津戸三郎や熊谷直実の努力で、一国に専修念仏の行者が三十余人もできた機縁純熟を喜び、念仏往生の誓願は

弥陀の本地の誓願、釈迦の出世の本懐であることを教える。九月二十八日付。（『九卷伝』卷三上、『四十八卷伝』卷二十八にもある。）

3、津戸三郎が法然上人の病いを気遣い、上京見舞の旨の書状に対して、病気の経過を述べ、快方に向きはじめてので、上京すまじき事を述べ、念仏して互いに往生することが大切と思うという内容である。四月二十六日付。（『拾遺黒谷語録』のみにある。道光は「わたくしにいはく、これは命をおしむ御療治にはあらず。御身おたしくして念仏申させ給はんかためなり。下巻の『用心抄』のおほりを見あはすへし」という。）

一、『ある女房に示す法語』第四

念仏の行者の心得を示したおことば。念仏の行者は必ず来迎にあずかることを存知して念仏申す以外のことはない。三心についても「ふさねて申す時は、たゞ一つの願心にてせうろうなり」といい、それぞれを説いて、九品往生には必ず各おのに三心と来迎はあるべきことを教え、「われらかためにほとこし給他力と申候は、第十九のらいかうの願にて候」と教えている。（『四十八卷伝』卷二十四にもある。）

『拾遺黒谷語録』卷下

一、『念仏往生義』第一

念仏往生について教えたもの。百即百生の念仏往生ではあるが、疑うものは生まれぬと疑心を戒しめ、世間の営みの中にこそ念仏を行すべきことを述べて、三心具足の一向専修念仏を勧め、かねて廃悪修善にも心を用いて、「かまへて善人にしてしかも念仏をも修すへし」と教える。（『拾遺黒谷語録』のみにある。）

一、『東大寺十問答』第二

東大寺上人といわれる俊乗房重源（一一二一〜一二〇六）の間に答えたもの。

1、浄土宗の教判と『浄土三部経』。2、正雑二行は共に本願か。3、三心具足の念仏者は決定往生か。4、念仏の時、数珠は必ずしも不要か。5、東大寺の大仏の計いで往生できるか。6、有智・無智の人の道心。7、念仏の人は撰取の益にあずかるか。8、撰取の光明は不退か。9、本願文の十念と願成就文の一念は平生か臨終か。10、臨終の来迎は報仏か。（『拾遺語灯録』のみにある。）

一、『御消息』第三

1、浄土往生の心を強く持ち、念仏を行すべきことを教える。前便に聖浄二門の中には浄土門に入るべきことを勧めたので、今度は浄土門について、安心起行の中、安心の三心を詳しく示した。至誠心とその具足の不同、深心とその釈の二種信心を説き、別解別行に破られない決定の信心を持つべきことを勧めて回向発願心へと進み、総じて三心を具すべきことを教える。（『拾遺黒谷語録』のみにある。道光は「わたくしにいはいはく、浄土門に入へき御消息ありけりと見えたり。いまたたつねえず」と付記している。）

2、「ある人のもとへ遣わす御消息」で、念仏往生は仏説であるから、いかなる理由をもつても否定することができないことを示して、疑い心を持つべきでないことを説く。（『拾遺黒谷語録』のみに見える。）

3、「熊谷入道へ遣わす御返事」である。直実の求めに応じて念仏の教えを示した。念仏の行は仏の本願の行であり、弥陀の化身である善導和尚の教えであるから、但念仏が決定往生の業であることを教える。合せて不姪戒、不瞋戒の持戒や、孝養、錫杖、迎接曼荼羅等のことも大切ではあるが、すべて念仏の次の事であるといひ、三万五万六万と一心に念仏を勤めれば、少々戒行が破れても、その事によらずして必ず往生できると教える。ただし孝養の事は本願ではないが、母上は八十九歳でもあるので、今年あたりはと、孝養をつくして待っていてほしいと思う、というような内容である。五月二日付。（京都嵯峨清涼寺藏法然上人真筆「熊谷直実宛御消息」、『四十八卷伝』卷二十七

にもある。)

4、「ある時の御返事」とある。熊谷入道が自分の往生の期を知ることができるような祥瑞を感得したのであるか、その事を悦ばれ、ますます念仏精進すべきことを説かれたものである。四月三日付。(『四十八卷伝』卷二十七にもある。道光は「わたくしにはく、これは熊谷入道、念仏してやうくの現瑞を感じたりけるを、上人へ申あげたりける時の御返事なり」と付記している。)

一、『往生浄土用心』第四

念仏往生についての心得に十箇条を示したものの。

- 1、毎日の所作は六万遍。
- 2、宿善と念仏往生(『三部経釈』の所でふれたが、この項で三字の名号を説く。)
- 3、無言の念仏。
- 4、百万遍の念仏。
- 5、逆修。
- 6、信心。
- 7、臨終来迎。
- 8、臨終正念。(「八つの事しるしてまいらせ候」とあるが、数としては七つである。今仮りに後世者の段で分けて八つとした。)
- 9、念仏相続。
- 10、肉食。(今仮りに内容別に二つとして十とした。)(『四十八卷伝』卷二十三にもある。)

『拾遺黒谷語録』卷下

道光の後序。(序文の所で解説した。)

『語灯録』瑞夢事(道光の記述であろう。)

瑞夢によつて『語灯録』を見ることのできた嵯峨の女御が、めでたく往生を遂げたことを記している。あわせて『語灯録』を見て、安心決定し、往生を遂げた人が多いことは当然のことと書いている。

(深 貝 慈 孝)

浄土宗聖典 第4巻

平成11年3月25日発行

編集 浄土宗聖典刊行委員会
編集協力 浄土宗出版室
印刷 株式会社 図書印刷
発行 浄土宗

浄土宗宗務庁

〒605-0062 京都市東山区林下町400-8
☎(075)525-2200(代)

浄土宗東京事務所

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4
☎(03)3436-3351(代)

ISBN4-88363-126-5 C3315

